

特集 イワクラサミット in 鳥羽



イワクラサミット in 鳥羽 タイムテーブル

第1日目（5月27日 土曜日）

- 2時30分 受付
- 3時20分 理事会開催
- 3時50分 総会
- 4時00分 研究発表
 - 1. 「飯の山」とイワクラの古代測量
岩田朱実
 - 2. 方位と選地の謎
大河内俊光
 - 3. 古代祭祀と大和三山の暗号
藤原定明
 - 4. 矢岳高原イワクラの現状
谷口実智代
 - 5. 総評
渡辺豊和
- 8時30分 （休憩）
- 19時00分 懇親会
- 21時00分 自由時間

第2日目（5月28日 日曜日）

- 8時30分 エキシブ鳥羽出発
伊勢の巨石と伊勢神宮参拝
(20年に1度の木曳き行事見学)
- 12時30分 帰りの時間が迫っている人伊勢
神宮外宮で解散
- 14時50分 帰りの時間が迫っている人近鉄
鳥羽駅で解散
- 17時00分 エキシブ鳥羽帰着 解散
- 17時20分 近鉄鳥羽駅 解散

イワクラサミット in 鳥羽

ドキュメント



会員 高橋政和

5月27日土曜日

※サミット初日。

当日スタッフとして10時に現地入り。会場の設営から機材の確認まで。受付自体は12時30分からだったのだが、早めに訪れた方も多く、そうした人達はホテル内のロビーやレストランでゆつくりと過ごされていたようだ。エキシブ鳥羽は立地も良

く、あいにくの悪天候だったが、鳥羽の風景を楽しみながらゆつくりと時間を過ごせる環境だった。

※ 研究発表

岩田朱実氏の研究は、十二年以上もの間、一つの研究テーマに取り組んで全国を見て回った経験の一つの集大成となる、迫力のあるものだった。「飯の山」という地名が共通す

るといふ背景がまずわかりやすい。淀みなく話す氏の口調に皆も引き込まれていたと思う。個人的には、地図に線を引いて何がしかの特異な図形を発見する、という手法にはもういい加減飽き飽きしている。WhyとHowの二つが欠ければ、たとえ地図上に正十二角形が書けたとしても、それはただの偶然にすぎないからだ。氏の研究には、その「理由」と「測量手法」が明快に記されていたので、私のような人間でも楽しんで聞くことができた。ただ地図に線を引いて図形ができて喜んでいられるだけの研究では決してない。研究の重大な論拠となる、陰陽道の知識が私にはほとんどないため、事の正否自体は私にはよくわからないが、十分に鑑賞に耐えうるものだったと思う。大河内俊光氏の研究は、それこそ三十年以上の時間をかけてゆつくりと成熟させたもので、氏の人生をも思わせる。ちなみに、過去のイワクラサミットすべてを通して、大河内氏は最年長の研究発表者になるのでは、と思った。高齢を理由に、前線に立つことに抵抗を感じる会員にも

勇気を与えるものだと思う。国内に存在するほとんどのイワクラと古い神社の配置は、同じ法則性を持って意識的に配備されたもの、という氏の研究成果は今後もっと詳細な文献研究などを行うべき価値のあるものだと思う。なお個人的な話になって申し訳ないが、私の先祖にあたる宮崎県の行藤神社が本学会での研究に登場したのは初めてだったので、やたら嬉しく感じた。藤原定明氏の研究は、最新情報を満載したホッとした研究事例だった。学会会報創刊号から、彼の名前を知ってはいたが、実際に本人の研究発表を聞くのは初めてだった。ごく最近の発見から、短い時間で大きく話を展開させる藤原氏の口調に一同のまれてしまう。これが成せるのも、やはり長年研究してきた、一つのバックボーンというものがしっかりあるからなのだろう、と感じた。氏は個人研究の成果を書籍の形でもまとめておられるので、興味のある方はその辺りも参照願いたい。

谷口実智代氏の研究発表は、一言目が「新しい発見はありません！」



研究者との直接的な議論もやはり、そう。是非今後もサミットへは、多くの方の参加を促したい。

※ 研究発表全体について

発表のすべてが、発表者自身の、足を使った地道なフィールドワークに基づくものだった。文献を眺めているだけでは決してわからない、当地に住む、イワクラを大事にしていた人たちの息吹を感じさせるもので、これは相変わらず素晴らしい。ただ、最近逆にその「文献」が、やや軽視されつつある雰囲気も率直に感じた。現地調査と文献精査。この二つはイワクラ研究にとっても、重要な両輪となるはずなので、イワクラ研究を志すならば、双方ともにその精度を上げれば、より質の高い研究となると思う。もつとも単純な例を出すと、「新発見！」と銘打ったものが、実は以前既に他人が発表していた研究だった、という間の抜けたものにもなりかねないからだ。最近、先人の研究成果をふまえて、さらにそれを発展させた研究、というものが少ないようにも思う。ただ、それ

を個人レベルですべてカバーするのにも無理があるし、学会としての、その辺りの資料整備、公開も急務であると感じた。誰がそれをやるのか、という問題は当然あるが……。人員と財政の問題は依然として残る。会に所属しているすべての人間の、研究を支援するためのバックボーンはやはりまだまだ弱い。今後の課題。お金がなくとも近隣の仲間と協力してカバーしあえるものは、どんどんカバーしあった方がいいと思う。全体の雰囲気としては、例年以上に発表後の質疑応答が活発に行われていたのでは、と感じた。これ自体はいい傾向だと思うので、もつと多くの人が質疑に参加できれば、とも思う。難しい質問でなく、素朴な疑問で構わないので。あとは質問を受けた発表者は、わからないことは「わからない」と答えてもいいと思う。自分の研究を発表できるチャンスが、年に一度のサミットしかない状況では、焦りも生じるかもしれないが、いろいろと手はある。それが重要な質問であると感じたならば、たとえ

ばサミット後の会報などで、返答として改めて寄稿してもよいと思う。発表に対する質問であっても同様。サミットに参加できなかった人であっても、発表論文を確認して、質問があればどんな会報上でしても構わないと思う。投げっぱなしの研究に陥らないよう、そういった切磋琢磨は学会としては当然あつて然るべきものではないだろうか。また、一人あたり50分もの発表時間は破格の待遇だと思う。学会にもよると思うが、これほど余裕のある発表時間は大学教授クラスのものでは。イワクラ研究は自由度が高い反面、時にその結論が凡人には突飛に感じられるものもあるため、そういったゆる直感によるところが大きい研究についても、50分あればゆっくりとわかりやすくプレゼンテーションすることは可能なのではないかとと思う。せっかくの面白い研究も、途中経過をすべて省略して、発表してしまつたのでは、その話を初めて聞く者にとっては説得力に欠けている、と思われるかもしれない。研究する方は長年の蓄積があるが、聞く方には大抵その土台がないのだ。話が

拡散するだけでは50分という時間の使い方はもったいないと思う。事前に近隣の仲間と協力し合うなどして、より良いプレゼンテーションとなるよう、発表直前の準備にも、もっと時間をかけてもいいと思う。もちろん、聞く方にもそれなりの知識はあるに越したことはないので、それは各人向上心を持って学習しておいた方が、より他人の発表を聞いたときに楽しめると思う。また、これも近隣地域の人たちで協力して、合同学習会や現地実習などを行うといいかもれない。結局近隣地域の人間同士で手を取り合うことは、発表する人間にとっても有意義なことになるということだ。プレゼンテーションの形式はできる限りパワーポイントに統一した方がトラブルは少ないと思う。ただ、再三、事務局からはアナウンスされているが、やはり発表者の技術的には難しい面もあるかもしれない。それをおして尚、サミットよりも前に、事務局や近隣の会員と協力して、できる限りパワーポイント形式での発表を実現した方が、当

日質の高い研究発表が行えると思う。以上をふまえての一意見となるが。最近、関東などでイワクラ学会の地方分極の動きが起こっているが、近隣地域の会員で協力体制を取るのなら、こういうところでこそ協力しあった方がよりレベルの高い学術活動を行えると思う。サミット当日でぶっつけ本番でなく、地方で事前に発表リハーサルを行うといった活動も、あわせて是非お願いしたい。そういう意味でも、関東グループには率先して会の手本になってもらいたい。それが学会全体の質の向上につながるのだから。また、これはスタッフサイドとしての反省事項だが、やはり会場でのスタッフ主導によるリハーサルも必須。前回2005年のイワクラサミットin宮崎では、サミット前日から会場を確保できており、また前日から動くことのできる十分なスタッフが存在していたので、余裕をもってリハーサルを行うことができた。今回は諸般の事情により、当日朝からしか事前準備の時間が取れなかったために、少しバタバタしてしまった。多くの参加

者の手助けにより、なんとかクリアすることはできたが、迷惑をかけてしまったという思いは強い。

※ 研究発表、その後

研究発表の後は、大ホールにて懇親会。遠方から来た人も多く、皆疲れているが滅多に集えない同好の士ということ、最後まで楽しく交流していたようだった。宮下文書の執筆者の子孫の乾杯の挨拶から始まるという、その筋の人間にとってはたまらないであろう交流会だった。本当に一種独特な人間ばかりが集っている。なかなかこういう機会はないと思う。

交流会の前後に、エキシブ鳥羽の温泉を楽しむ。解散後は有志で一室に集い、深夜まで飲み明かした。

※5月28日(日)

朝七時頃起床。ホテルの食堂で朝食をいただく。鳥羽ならではの海の幸を尽くした朝食で目を覚ます。エキシブ鳥羽出発。バスで伊勢のイワクラツアーへと向かう。

※ 朝熊山



まずバスで朝熊山に向かう。昔から、「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と言われていたらしい。バスが朝熊山を登り始めた辺りで、突然バスが停まった。なんと渡辺会長と、前日研究発表を行った岩田氏の二人が歩いて山に登っていたのだ。笑顔でバスに乗り込んでくる二人。朝熊山のそばにある「飯の山」に早朝から登っていたのだという。朝熊山山頂には、むき出しの露岩があり、これが今回の「イワ

クラ」だということだ。インターネッ
ツトでも「イワクラではないのか」
と数年前から話題にはあがっていた。
山頂イワクラの脇に立てられた看板
に「あさまとはアイヌ語で日が出て
キラキラと光り輝く神を意味するこ
とから、この山上で、日の出を遥拝
し太陽神としての天照大神を崇拜す
る信仰が生まれました」とある。



イワクラに空いた盃状穴に西原氏
が口をつけ、石笛の妙技を披露して
くださった。山頂からは伊勢の海
がよく見える。神々の宿る島が点在

している。

※ 金剛證寺

バスは朝熊山のすぐそばにある金
剛證寺に。広く静かな境内をしばし
散策する。栓皮葺の寺院の屋根から
は、朝の雨が乾いて水煙を上げてお
り美しい。弘法大師の中興というこ
とであったが、なぜか宗派は臨済宗



だった。本堂のすぐ脇に、祀られ
ていると思しき小さなイワクラがあ
ったが詳細はわからない。境内に生
えている木々はどれも巨木で、歴史
の古さを思わせた。またゆっくりと

訪れたい。

※ 伊勢神宮内宮

伊勢神宮内宮へと向かう。サミッ
ト参加者の多くも既に来たことがあ
った。二十一年に一度の遷宮が迫り、
次の遷宮先の地は清められ、主が来
るのをひっそりと待っていた。狭い



足場にごった返した観光客が、それ
を遠巻きに眺めては写真などを撮っ
ている。五十鈴川のほとりにあると
いうイワクラのもので一同集合写真
を撮ったとのことだったが、列の最

後尾についていたため、私を含め、
数人が写真には参加できなかった。
遅れてはならじと思ひ、まっしぐら
に本殿に向かっていたのだが、途中
で追い抜いてしまったらしい。正直
言って行き先くらいは教えておいて
ほしかった。少し寂しい。神馬の
厩舎でしばし皆が来るのを待って
いると、木挽き祭に参加すると思しき、
地元の町民たちが町ごとに同じ法被
を着て次々と鳥居をくぐってくる。
すべての木挽きチームが鳥居を通り
過ぎる頃、先発部隊が来たので合流。
時刻は昼前になっていた。柳原さ
んの案内に従い、神宮撰社、大山祇
神社の裏にあるという『硯石』なる
巨石を見に行く。昼食の時間を削っ
ての行動だったので、希望者のみ募
ったが結局ほとんど全員が参加した。
皇大神宮所管社の一つ、大山祇神社
に向かう。目指す硯石は大山祇神社
の裏にある。小高く盛り上がった
丘のような場所の中腹に、そのイワ
クラはあった。高さは5メートルほ
ど。木々に埋もれて外からはよく見
えない。柳原さんが言うにはこれが
文献にあった「硯石」ではないか、

ということだった。何の文献かは聞き漏らした。何の案内もない。ただ、丘の斜面に沿って、岩を取り巻くように木で組んだ階段が設けられており、岩を迂回して丘の上に登れるようになっていいる。丘の上は広場になっており、駐車場と言うならば普通乗用車が五台くらいは停められそうなくらいの広さはある。広場からは岩の頂まですぐ渡れるようになっており、何らかの機能を持った場であることは感じられた。それが祀り場としてのものなのか、単なる空き地なのか、ましてこの巨石が「硯石」であるかどうかは私にはわからないが。詳細な情報が待たれる。おかげ横丁で皆、思い思いの場所に別れて昼食をとる。バスガイドに薦められたコロッケを数人で買いに行き、横丁内にて食す。朝の曇天と打って変わり、陽射しが暑いほどだった。さすが太陽崇拜の伊勢神宮と言ったところ。何度か神宮には来ているが、雨の記憶は無い。

※ 伊勢神宮外宮

伊勢神宮外宮に向かう。式年遷宮

のため、今年は神宮の建材となる御神木を切り出し、町中を引き回す木挽き祭が行われていた。巨大な木柱を伊勢の住民が皆で力と声をあわせ、ゆっくりと引いている。大人たちは神木にまたがり、あるいは綱を引き、あるいははやしたて、子供たちは行列の周りを行ったり来たり走り回っている。よく晴れた青空の下その光景を眺めていると、不意に涙が出た。外宮に参拝。境内の中心にまで至ると、我々の目にはまず、何も無い所に小さく置かれた三つの石が祀られているのが目に付いた。「三ツ石」なるイワクラだ。いわれはよくわからない。「亀石」なるイワクラが境内に存在する。羽を広げたような白い岩盤で、敷地を横切る川にかかった、橋のような役目を果たしている。亀石にはいくつかの盃状穴が空いている。外宮から見える山中の禁足地にもイワクラはあるとのことだった。外宮から出る際、平清盛が冠が当たったということに怒って真つ二つに切り裂いたという「清盛桶」なる巨木があった。

一見の価値あり。

※ 二見夫婦岩

二見夫婦岩に向かう。沖に沈む太陽を模したイワクラ、「興玉神石」を遥拝するための鳥居となるイワクラ。大小の男岩、女岩のペアの岩が海中から突き出ている。有名なイワ



クラなので、もちろん訪れたことのある人は多かったのだが、改めて眺めてみると、女岩の方は人為的に組まれたことがある、と発言する人が多かった。言われてみれば確かにその通りだったので、帰宅後調べてみると、女岩は大正十年に台風で一度倒壊し、とある企業が修繕を行ったとのことだった。一週間ほど来るのが遅かったが、ここでは毎年五月に、夫婦岩の先にある興玉神石に生えた藻を刈る「藻刈り神事」が毎年行われている。神社の巫女にお話を伺うと、たまたまその巫女さんは今年の神事で舟に乗り、藻を刈った当人とのことだった。今年は海水が濁っており、舟の上からもその姿は見えなかったということだ。侵食と海面上昇の影響で、現在では興玉神石は見ることは見ることはできないが、古い絵図面には、海中から突き出た興玉神石の姿が描かれているそうだ。



※ 伊雑宮

時間に余裕があったので、伊雑宮へ向かった。予定にはなかったが、これも個人的に七年越しで見に来たかった場所なので感激する。人でごった返す伊勢神宮より、こちらの方がよほど聖地としての役割を残しているのではないかと個人的には感じた。社務所の横に根元が膨れ上がった楠があり、歓声が上がった。自然の環状除皮に



よるものかもしれないが、これほど見事なものを見たことがない。禰宜にお話を聞いたが、なぜこうなるのかはわからないとのことだった。

※ オウム岩

日没が近かったがまださらに時間があつたので、オウム岩に向かった。山頂の巨大な岩壁が、人の声を反射してオウム返しに反響させるのがその名の由来。オウム岩のすぐふもとの草原で、須田氏のムビラと西原氏の石笛の音が響き渡り、オウム岩



に反響してどこまで広がっていた。

※ サミットその後

来年のサミット開催地の希望を募ったところ、愛知県豊田市が手を上げた。「愛知発 巨石信仰」の出版チームである愛知磐座研究会の中心メンバーである学会理事・中根洋治氏の挙手ということもあり、誰からも異論は上がらない。来年のサミットは豊田で決定。また事務局より正

式なアナウンスがあると思う。

鳥羽でのサミットということもあり、比較的近い愛知県からの参加者も多く、中根さんの呼びかけに応じ、その場で大勢の愛知チームが顔を合わせることもできた。6月末に豊田市で一度、サミット前会議が中根さんの主導で行われた。今後の計画と、豊田市のイワクラの現地調査などが行われた。今後、来年度の開催に向けて活動が活発化していくものと思われる。

了